

静中の動

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

川口基督教会は、昨年12月13日から、コロナウイルス感染症の拡大防止のため主日礼拝や諸活動の中止を決めました。3月から6月までの礼拝中止に続いて2度目です。その結果、昨年はイースター礼拝もクリスマス礼拝も出来ないという異常な一年となりました。聖堂での礼拝だけでなく、会館など全てにおいて集まることや様々な活動を控えることで、教会の動きは静まり返っています。

そういうなかで、私は寂しい気持ちに包まれながら二つのことを思い浮かべました。まず一つは、初代教会の「カタコンベ(地下墓地)」での礼拝の様子です。迫害下にあった当時の教会は、人の目を避けてカタコンベに密かに集まって礼拝を献げましたが、声を出し合って唱えたり歌ったりすることは控えていました。ましてや集まっていることがバレたら、ローマ帝国より厳しい目に遭うことに決まっていたからでした。極力少人数で、隠れて、密かに、静かに、小声で。当時の人々は飛沫が飛ぶのを心配したわけではないものの、結果としては、あたかもコロナ禍の礼拝中に歌うことや会話を避けたことに似ています。

もう一つは、「静中の動、動中の静」という言葉です。「動」は、全ての動物の特徴です。名称自体が動物なのも、それを物語ります。しかし、本能に従って生きる動物とは違って、人間はあえて「動」をせず「静」を選ぶことが出来る存在です。神様も一週間の働きの中で安息日を定めて守ることを命じられたように、「動」と「静」とは、コインの両面のような関係を持っています。

さらに、物理的には動と静とは、全く分離されたことですが、人間の場合には、動の中で静を持ち、静の中で動をすることができます。例えば体は動かないとしても、心の静けさを持たなければ、まるでずっと動き回っていたかのように人間は疲れてしまいます。逆に、動いているのにも関わらず、静けさを持ち歩くこともありえます。

大事なものは、いつも動かなければいけない動物的な存在でありながら、自分を見つめ直す尊い静の時を併せ持つことです。また、静は、これからの動のためにも欠かせないものです。静は、神様の被造物である自分を省みる時間であり、世間の日常的な喧騒から離れて神様に心を合わせる祈りの時、霊的な成長の時間です。

コロナ禍で礼拝に集まることは出来なくなっています。人間の移動や接触というのを媒体に繁殖するウイルスを避ける術ではありますが、この際に、静けさの中で働いておられる神様のみ業に心を馳せる経験ができればと願っています。

天は神の栄光を物語り
大空は御手の業を示す
昼は昼に語り伝え
夜は夜に知識を送る
話すことも、語ることもなく
声は聞こえなくても
その響きは全地に
その言葉は世界の果てに向かう

(詩篇 19:2~6)